国宝

金地螺鈿毛抜形太刀

この豪華な太刀は、12 世紀の職人技の優れた逸品である。錆びたその刀身はもはや鞘を外すことはできないが、この太刀の重要性は主にその精巧な金具と螺鈿細工の見事な実例ということにある。柄や鍔の装飾的な縁取りや、その他いくつかの装飾部分は純金で、見た目よりずっと重い。

この刀は御所の衛兵が携行する奉納用の武具を模して造られた。それは特に柄に顕著で、「毛抜き型」様式になっており、中央が開いていることが特徴である。12 世紀に作られたこのような刀は、現在ではほとんど残っておらず、この特徴的なデザインの目的は明確になっていない。

鞘の両側には、猫が雀を追いかけて捕まえ、誇らしげに立ち去る場面が先端から鞘口まで連続して描かれている。この場面は、金粉を厚く振りかけた黒漆の地に螺鈿細工で描かれている。螺鈿細工にはアクセントとして青いガラスが使われているが、これはこの刀が作られた当時は高価な輸入品だった。この当時、手作業で彫られた竹の細部や猫の表情は、職人の熟練した技術の証である。

芸術的価値に加えて、この慎重に作成されたシーンは、重要な歴史的詳細を示している：猫が首輪をして描かれていることから、平安時代（794-1185）には猫がペットとして飼われていたことがわかる。当時、猫が美術の題材になることはほとんどなかったため、この刀のモチーフには、当時の姿を視覚的に示す副次的な意味が含まれている可能性がある。